



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	彰考館旧蔵アイヌ語テキスト「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」について
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 109, 31-58
Issue Date	2003-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34038
Type	departmental bulletin paper
File Information	109_PL31-58.pdf



彰考館旧蔵アイヌ語テキスト 「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」について¹

佐 藤 知 己

0. はじめに

アイヌ語の古い記録には種々のものが知られているが(金田一 1937 [1993]),それらは語彙に関するものが大部分で²,テキストの資料は極めて少ない。量的にある程度まとまっていて,しかも質的に信頼性の高い古いアイヌ語テキスト資料は,これまでのところほとんど知られていないと言ってよいであろう(佐藤 1995: 序)。このような状況の中で,本稿で扱う「蝦夷チャ

¹ 筆者は本書(東大本)の存在を元北海道大学付属図書館北方資料室司書吉田千萬氏からの御教示で初めて知った。その後,北海道立図書館所蔵の國學院大學付属図書館所蔵金田一京助旧蔵資料マイクロフィルム(HM385)中に金田一本を偶然見出し,複写することができたのは幸であった。本稿執筆にあたり道立図書館のマイクロフィルムの確認作業を行ったが,その際,司書の大島教子氏に大変お世話になった。東京大学総合図書館には南葵文庫本の閲覧に際して便宜を受けた。宮沢俊雅先生は書誌学や表記に関する筆者の幼稚な質問に懇切に答えて下さった。これらの方々,諸機関,及び本稿で資料を引用したアイヌ語千歳方言話者白沢ナベ氏,静内方言話者織田ステノ氏,様似方言話者岡本ユミ氏にも深く感謝申し上げる。なお本稿は,平成14年度科学研究費(「消滅の危機にあるアイヌ語諸方言の方言分類に関する研究」(課題番号12039202),研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己[特定領域(A)「消滅の危機に瀕した環太平洋の言語」,研究代表者大阪学院大学教授宮岡伯人],基盤研究(C),「古文獻によるアイヌ語諸方言の研究」,研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己,課題番号12610547)による研究成果の一部である。

² 金田一(1937 [1993]: 10)は,上原熊治郎『藻汐草』が巻末に「チャランケ」,「ユーカラ」などの種々の文章を載せていることを紹介している。しかしながら,以下において

ランケ並浄瑠璃言」は、数少ないアイヌ語の古いテキスト資料の中でも、注目に値するものである。金田一(1937 [1993] : 85) は次のように述べている。

「彰考館には優れたアイヌ語の記録がある。ユーカラ及びチャランケの筆録で、ユーカラとしては寧ろ極めて短い小篇ではあるが、立派なアイヌ叙事詩のテキストであり、写し方が極めて正確であって、果して何人の記録か。元禄の昔、誰がこの様に正しくアイヌ語を聞き分け、又記録することが出来たか、と考えて来ると、どうも、元禄の時のものでは或は無いかも知れない。」

このような金田一の指摘にもかかわらず、管見の及ぶ限りではこの文献の解説や言語的な研究はまだなされていないようである。本稿は原文の解説を通して、表記の特色、記録されているアイヌ語の言語的特色を明らかにし、金田一の指摘をより具体的に検証しようとするものである。

1. 諸本および関係資料

「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」は、大正7 [1918] 年刊の『彰考館図書目録』(彰考館 1918 : 766) に記載がある。それによれば、「蝦夷チャランケ並浄瑠璃、一、三十三、寫」とある(番号と略号は、それぞれ、一冊、所蔵番号三十三、写本、の意)。書名に「言」の字が欠けているが、同じ本と考えてよいであろう。なお、現在、彰考館文庫を管理している徳川博物館(水戸市)に本書の彰考館本の存否を照会したところ、現在、同館に「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」という表題の書籍は見いだされない、という解答を得た(平成14年1月

明らかとなるように、少なくとも『藻汐草』の「チャランケ」の一部には印刷に至るまでの過程で発生したと思われる誤りが非常に多くみられる。だとすれば、「ユーカラ」をはじめとする他のテキスト部分にも相当な誤りが含まれている可能性が少なくないと推測され、『藻汐草』のテキストの資料的価値を無条件に評価することは危険ではないかと思われる。

17日付彰考館徳川博物館本田貴子氏よりの来信)。旧彰考館は敗戦直前の昭和20年8月1日、米軍の空襲を受けて焼亡しており(福田1991)、その際、本書の彰考館本は疎開されなかった他の多くの貴重な文献と共に焼失してしまった可能性が高いと考えられる。本書の写本は管見の及ぶ限りでは両者共に彰考館本を筆写した、昭和4年金田一京助筆写本(以下、金田一本)と、東京大学付属図書館南葵文庫本(E39/125)(以下、東大本)以外には知られていないようである³。金田一本には、奥書に「右蝦夷チャランケ並浄瑠璃言一冊(紙数総六枚)者水戸彰考館蔵本而昭和四年七月九日假寫於同館之複寫於自宅者即是也 昭和四年八月十九日」とある。また、東大本は題簽に「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言 享和辛酉樺太事状 蝦夷暦 安政三丙辰年暦」とあるように、三冊の合冊となっている。金田一本は、いうまでもなく碩学による筆写本⁴であり、全般的に信頼性が高いのに対し、東大本は詳しい事情は不明ながら、アイヌ語とは特に関係のない人による筆写と思われ、このことは金田一本と比較するとところどころ明らかな誤写と思われる箇所がみられることによって明らかである。もっとも、金田一本も、細部では全く誤りがないとは言い切れず、数は少ないながら、東大本のほうが彰考館本を正しく写していると思われる箇所もないではない。従って、本書の研究にあたっては、やはり両写本の比較が必要と思われる(詳細は以下の本文翻刻を参照)。「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」には三つの内容の異なるテキストが含まれて

³ 南葵文庫は大正13年に東大に寄贈されている(井上宗雄他(編)1999:421)。南葵文庫(1908)には本書の記載がない。なお、京都大学付属図書館にも「蝦夷浄瑠璃譯文」と題された写本(言語2H//10)が所蔵されているが、これは金田一(1931a:372)で紹介されている、同じく彰考館所蔵ではあるが、内容的に全く別の本(雷神の妹の話)の写本の一つではないかと推定される(彰考館1918:762に「蝦夷浄瑠璃」の記載があり、平成14年1月17日付の彰考館徳川博物館本田貴子氏よりの解答では所蔵しているとのこと。ただし、平成14年10月現在閉館中のため筆者未見)。

⁴ 池上二良先生によれば、金田一先生の奥様の筆である可能性もあるとのこと。また、筆者が見ることができたのはマイクロフィルムのみであり、朱書と思われる傍注はやや薄く、判読が困難な場合もあった。なお、原本の所在は未確認である。筆者の怠慢を恥じるとともに、金田一家、國學院大學への照会も含め、今後の課題としたい。

いる。今回の研究の結果、この点は金田一も指摘していないことであるが、それらのうちの少なくとも一つのテキストは、他の資料と密接な関係にあることが明らかとなった。すなわち、以下の翻刻において便宜的に〔テキスト 2〕と呼んでいる「酒盃之席亭主江祝儀之口上」は、寛政四〔1792〕年成立の上原熊治郎『藻汐草』の巻末に含まれている「チャーラケ 切口上なり」と題されたテキストとほぼ同じ内容のものであることが明らかとなった。注目されるのは、「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」のテキストのほうが藻汐草よりもはるかに精度が高い、という点である。また、細部で内容の不一致があり、これらから〔テキスト 2〕が、『藻汐草』、あるいは『藻汐草』が参照した資料からの単純な引用ではないことが明らかとなった。おそらく、別系統の写本をそれぞれ写したものと考えられ、このことはアイヌ語研究史上重要な意義を持つ『藻汐草』の成立を考える上でも今後、極めて重要な事実と言える。なお、〔テキスト 1〕、〔テキスト 3〕についてはこれまでのところ関係する資料を見出すことができない。今後の研究課題である。

2. 本文翻刻

凡例

金田一京助筆写本を底本として用い、東京大学附属図書館南葵文庫本、『毛し本草（藻汐草）』（市立函館図書館所蔵本）との異同を注で示した。その際、金田一本は金、東大本は東、『藻汐草』は藻、と略記して示す。

原文は縦書きであるが、翻刻では横書きとした。従って、原文でアイヌ語の片仮名テキストの右横に付されている傍注は、翻刻では上になっている。また、片仮名テキストの下に、推定されるアイヌ語形をローマ字表記で示し、さらにその下に逐語的な訳を付した。なお、アイヌ語形の表記には以下の記号を用いた。p, t, k, c, s, m, n, r, w, y, h, i, e, a, o, u。なお、推定される語形は細部が不確実な場合が少なくなく、表記は概略的なものであることをお断りしておく。

写本の傍注の日本語の仮名表記は判読困難なものが少なくなく、今後課題を残している。翻刻にあたっては、現時点での判読結果を忠実に示すために、読みにくさを承知で元の表記に相当すると思われる変体仮名を用いた。

文字の大小（「ツ」と「ッ」、「ウ」と「ゥ」等）は判定が微妙な場合が多く、すべて大文字で翻刻した。今後の研究課題としたい。また、文字と文字との微妙な位置関係も完全には再現し切れなかった点がある。

金田一本には「エ」の他に「エ」またはそれに近い字体も現れ、不注意による可能性もあるが、翻刻において統一はしなかった。

金田一本、東大本ともに句の切れ目を示したと思われる小さな三角形の印が付されている。写本では中央よりやや右よりに付されている場合が多いが、翻刻ではやむを得ず中央に置いた。

便宜上、「チャランケ前口上」を〔テキスト1〕、「酒盃之席亭主江祝儀之口上」を〔テキスト2〕、「夷浄瑠璃」を〔テキスト3〕とした。また、各テキストに行番号を付した。

金田一本の丁合を（表紙）、（1丁表）のように（ ）に入れて示した。

（表紙）

蝦夷チャランケ⁵ 言

並浄瑠璃

（1丁表）

蝦夷チャランケ 言⁶

並浄瑠璃

⁵ 表題。「蝦夷」と「言」がやや大字で書かれ、間に「チャランケ」、「並浄瑠璃」が小字で書かれている。これは金、東共に同じ。ただし、東には金にはない「原本水戸家蔵」という文句が右下に書かれている。

⁶ 東にはこのような表題なし。

[テキスト1]

チヤランケ⁷ 前口上

- 人名⁸ と言蝦夷^{補注1} 昨日 便 持て来た 言者しめの処 言ふ
- 1 シュバルカ⁹△アリエクル△ヌマ子△シヨンゴ△コルワキク△イタクバタ△アキ
suparka ari ye kur numan sonko kor wa ek itak pa ta ay-ye
シュバルカ と 言う 人が 昨日 知らせを 持っ て 来た 言葉の始めに 言う
- 事 言阿里とて言事^{補注2} 言阿里て¹⁰ いふ事^{補注3}
- 2 クシキイタク△イタツケシタアイキ△イタツケシタ △アイキクシキイタク
kus ki itak itak kes ta ay-ye itak kes ta ay-ye kus ki itak
べき言葉 言葉の終わりに言った 言葉の終わりに 言うべき言葉を
- いふはしめに言 なに可 海のコ□¹¹ ころんた
- 3 イタクバタアイキ△子ブカイナ△アトウイベシヲツタ△カラカラ
itak pa ta ay-ye nep kay atuy pes ot ta karkar-
言葉の始めに言った。 何か 海の方へ 転がる
- 阿つ遍ても この様さ¹² それても 阿つ遍て
- 4 セワ△ア子ウヲマレイケカ△ウキベコラチアン△タプ子アンコロカ△アエウヲマ
se wa an-euwomare ike ka uype koraci an tap ne an korka a-euwoma-
て 集めても 木片のようだ そうであるけれど 集め

⁷ 東「チヤランケ」(傍線なし)。なお、「津軽一統志」(1731)には「ちやあらけ」とある(北海道1969:149)。また、『藻汐草』(1792)でも「チヤーラケ」(85丁裏)である。

⁸ 以下、傍注は東ではすべて朱書されている。恐らく金も同様であったと思われるがマイクロのため未確認。

⁹ 東「シエバルカ」。

¹⁰ 東「言阿里と」。

¹¹ 東「海の方」。

¹² 東「この様多」。

相手か多^{補注4} 便 やる¹³

- 5 レワ△ラムア^{ンクシ}タプ¹⁴△イ^{エト}ウナンカリ△アシ^ンコ¹⁵△ヲ

re wa ramuan kustap e-etunankar a-sonko o-
て 理解したので お前の方へ向かって 知らせを やっ

今日来た たより なかり¹⁶ 上手た 大工

- 6 マシテワ△タント^エク△シ^ンゴアナキ△子^フカイナ△アシ^カエ△バン^チヨ

mante wa tanto ek sonko anak nep kay askay panco
て 今日 来た 知らせは 何か 上手な 大工が

(1 丁裏)

ケツリマシタ 木の上 さねの様に¹⁷

- 7 チケウレ¹⁸△ニカベカ^{シユ}ミカ△トウリコ^ラチアン△

cikewre ni ka peka sumi ka turi koraci an
削った 木の上に沿って墨糸を 引くかのようだ

[テキスト2]

酒盃之席亭主江祝儀之口上¹⁹

何もいふ言れ²⁰ 酒のそいふ可²¹ら おれ阿志²²る

¹³ 東では、アイヌ語テキストの「ヲ」と傍注「やる」が共に次行へ改行されている。なおアイヌ語(金)「ヲマシテワ」、(東)「ヲマンテワ」。

¹⁴ 金では「ク」に虫損を表す「ムシ」の注記。

¹⁵ 東「アンヨンコ」。

¹⁶ 東「なに可」。

¹⁷ 東「さほの様ニ」。

¹⁸ 東「チケウシ」。なお、東は直前の「バンチヨ」に傍線なし。

¹⁹ 藻ではこの表題のかわりに「チャラケ 切口上なり」とある。

²⁰ 金では一応「れ」としてあるが最後の文字が判読困難。東「何といふ言可」。藻「何云」。

²¹ 金ではこの句頭の「酒」のみ確実。東「酒の□□可ら」(二字判読不能)。藻「宴中」。

²² 金は句頭三字のみ判読可能。残りの「志る」は不確実。東「おれ阿える」。藻「為焉」。

- 1 子ブイタキウン²³ △²⁴トノシリカ²⁵ △ウキイノンノ²⁶ △クキナンコラ²⁷ △レベロク²⁸

nep itaki tonoto sirka ueinonno ku-ki nankor a rep erok
何の言葉 酒上 祈り 私がするだろうか 沖の

むかしのいなを いゝ時分²⁹ イナヲノトリ³⁰

- 2 カムイ³¹ △エカシイナヲニツ³² △コバエツタ³³ △カムイコツチャワ³⁴ △エイナヲウクペ³⁵

kamuy ekasi inaw nit ? kamuy kotca wa einaw uk pe
神 先祖の御幣 神の前から 御幣を取る者

右の手者³⁶ むかしのいなを³⁷ 手かへて³⁸ 左の手³⁹ 酒の入多桶⁴⁰

²³ 藻「子フイタウン」(傍注「何云」)。なお、藻ではこの前に「イカラク子クル」(傍注「姪人」という一句があるが、金、東にはなし。

²⁴ 藻では△ではなく、「・」を用いる。以下同様。

²⁵ 藻の傍注「宴中」。

²⁶ 東「ラ井イノンノ」、藻「ワイヌンヌ」。なお、藻の傍注「慮」。

²⁷ 藻「クケナンコラ」(傍注「為焉」)。

²⁸ 金ではこの部分の傍注判読不能。東「沖の神」。藻「洋立神」。

²⁹ 東「いい自分に」。藻「持詣所」。

³⁰ 藻「祝身」。

³¹ 藻「レベツツカムン」(傍注「洋立神」)。

³² 藻「イカシイナウニツ」。金は傍注判読不可。東「むかしのいなを」。藻「先祖幣束」。

³³ 東「コバエヲツタ」、藻「コバイヲツタ」(傍注「持詣所」)。

³⁴ 藻「カムイコツチャワ」。金、東は傍注なし。藻の傍注「神前」。

³⁵ エイナヲウクペー藻はイ、ナウクペ。なお、金、東、共にこの句の後に△の記号がないが、藻は「・」で句切りが示されている。藻の傍注「祝身」。

³⁶ 藻「右手」。

³⁷ 藻「先祖幣」。

³⁸ 藻「捧」(なお、国書刊行会複製本には「捧」の後に文字が汚れか判然としない黒いしみ。このしみはたとえば市立函館図書館所蔵の、題簽に「毛し本草全一冊」とある一冊本[00388/005/3/001]には無し)。東「いゝ時分に」。

³⁹ 藻「左手」。

⁴⁰ 藻「酒桶」。

- 3 シュモンテケワ⁴¹ △エカシイナヲニツ⁴² △アツテカニ △ハリケテケワ⁴³ △シヤケシントコ⁴⁴
 simonteke wa ekasi inaw nit attekani harkiteke wa sakesintoko
 右手から 先祖の御幣 片手で持つ 左手から 酒桶
- 手尔もつて⁴⁵ 沖の神⁴⁶ 往付け 者⁴⁷
- 4 アツテカニ⁴⁸ △レベロクカムイ △コシレハイ⁴⁹ △キワネヤキ子 △アイノ
 attekani rep erok kamuy kosirepa ki wa ne yakne aynu
 片手で持つ 沖の神 に着く したならば 人間
- 便⁵⁰ 神の者なしに⁵¹ 者なし以志る⁵² 沖
- 5 ヲロシベ⁵³ △カムイヲイナ子⁵⁴ △エウコヤエラブ⁵⁵ △アリアナキ子⁵⁶ △レベ
 oruspe kamuy oyna ne eukoyayrap ari anakne rep e-

⁴¹ 藻「シモンテケワ」。

⁴² 藻「イカンノウニ」。

⁴³ 藻「ハリキテケワ」。

⁴⁴ 藻「シヤケシントコ」。

⁴⁵ 藻「捧」。東「手に」。

⁴⁶ 藻「洋立神」。

⁴⁷ 東「バ」。

⁴⁸ 藻「アツテカン」(傍注「捧」)。

⁴⁹ 藻と他のテキストとが大きく異なる箇所。前後も含めてしるせば、金、東「レベロクカムイ△コシレハイ△キワネヤキ子△」(傍注省略)に対して藻「レヘロツカムイ(傍注「洋立神」)、カムイシキシヤマ(傍注「霊眼傍」)、シレバヲツタ(傍注「着所」)」。なお、これに対しては rep erok kamuy kamuy sik sama sirepa ot ta のような語形が推定される。

⁵⁰ 藻「蝦夷説」。

⁵¹ 藻「神歌」。

⁵² 金では最後の三文字を「以志る」と判読したが不確実。東「者なしにしる」。藻「諷」。

⁵³ 藻「アイノヲロシベ」。

⁵⁴ 藻「カムイヲイナニ」。

⁵⁵ 藻「イウコヤイラブ」。

⁵⁶ 藻「キイワ子ヤキ子」(傍注「如此則」)。

話 神の歌として 語り合う というなら 沖の

(2丁表)

- | | | | | |
|----|--|-----|--|---------------------|
| の神 | | 神の扇 | | まへの本う ⁵⁷ |
|----|--|-----|--|---------------------|
- 6 ロクカムイ⁵⁸ △エイセツチセチウ⁵⁹ △カムイアウンキ⁶⁰ △エシレラツトム⁶¹ △
- | | | | | |
|-----------|--------------|--------------|--|---|
| rok kamuy | eiehetceeciw | kamuy awanki | | ? |
|-----------|--------------|--------------|--|---|
- | | | | | |
|---|-------|-----|--|--|
| 神 | 返事をする | 神の扇 | | |
|---|-------|-----|--|--|
-
- | | | | | |
|--------------------|-----|--|----|--|
| た、けは ⁶² | 扇の風 | | 此島 | |
|--------------------|-----|--|----|--|
- 7 シタイキヲツタ △アウンキマウエ⁶³ △タバンモシロロ⁶⁴ △チニシコユブ⁶⁵ △ア子
- | | | | | |
|---------------|------------|----------------|-------------|-------|
| sitayki ot ta | aunki mawe | tapan mosir or | ciniskoyupu | an-e- |
|---------------|------------|----------------|-------------|-------|
- | | | | | |
|-----|------|-----|--|---------------------------|
| 叩くと | 扇の風が | この国 | | ? 私が |
|-----|------|-----|--|---------------------------|
-
- | | | | | |
|----------------------|----|--|-----|----|
| そしていれ者 ⁶⁶ | 此酒 | | わかい | 女様 |
|----------------------|----|--|-----|----|
- 8 カラカル⁶⁷ △キワ子ヤキネ⁶⁸ △タバントノト △シユクブ △カツケマツ △

⁵⁷ 東「まへのはう」。

⁵⁸ 藻「レベコツカムイ」(傍注「洋立神」)。

⁵⁹ 藻「イエヘツセチユ」(傍注「嘆息其語」)。

⁶⁰ 藻「カムイアランケ」(傍注「神扇」)。

⁶¹ 藻「イシレラツトム」(傍注「胸」)。

⁶² 藻「叩所」。東「た、けば」。

⁶³ 藻「アンキマウエ」(傍注「扇勢」)。

⁶⁴ 藻「タハンムシロ、」(傍注「此住居」)。なお、藻にはこの句の前に金、東にはない「ヒリカタシコン子」(傍注「善嵐」という一句がある。

⁶⁵ 東「子ニシコユブ」。藻の傍注「雲狭」。

⁶⁶ 東「そしていれバ」。藻「如此則」。

⁶⁷ 藻「ア子ガラカリ」(傍注「授」)。

⁶⁸ 東「キワ子ヤキ子」。藻も「キワ子ヤキ子」。なお、藻はこの句以降最後までが金や東と大きく異なる。すなわち、藻「クカルクウタレ」(傍注「吾姪属」),「マワシノ、ボ」(傍注「無難」),「ヲカイナンコンナ」(傍注「居」),「セコツタウ子」(傍注「其段」),「イノンノイタク」(傍注「祈言」),「アンナ」(傍注「有」)。

karkar ki wa ne yakne tapan tonoto sukup katkemat
 する したならば この酒 若い 女

とく時分に ふところの方 此

- 9 エイゴヌマチ△ヒタワヤキ子△エシウア^{シヨ}ロロ⁶⁹△ヲトウシマコツタ△タバン
 numat pita wa ne yakne upsor or ? tapan
 紐 解くならば 懷の中 この

酒 とこまでも⁷⁰ 此島 島

- 10 トノ子イバクノカ△カムイチウブキ子タハンモシリ△モシリ
 tonoto neypakno ka kamuy cupki ne tapan mosir mosir
 酒 いつまでも 神の光となって この国 国

の上 そしていれ者⁷¹ どこまでも

- 11 クルカシウコセトウク⁷²△キワ子ヤキ子△イ子イハクノカ
 kurkasi ukohetuku kiwa ne yakne neypakno ka
 の上に出る ならば いつまでも

島 中 何□□名事も□□ていろふし⁷³

- 12 モシリ△ウフシヨロ △マワシノグニ⁷⁴ △子イナンコナ⁷⁵
 mosir upsoro mawasnu kuni ne nankon na
 国 中 縁起が良いよう であるだろうよ

⁶⁹ 東「エシウブ^{シヨ}ロロ」。

⁷⁰ 東「とこまでも」。

⁷¹ 東「そしていれバ」。

⁷² 東「クルカシウコセトウク」。

⁷³ 四文字判読不能。東「何んと王るい事もなくていろふし」。

⁷⁴ 東「マワシノクニ」。

⁷⁵ 東「子イナンコンナ」。

(2 丁裏)

[テキスト 3]

夷浄瑠璃⁷⁶

- 1 ウカムボキセイシカリチユフ子トンナタラ
ukamu poksey sikari cup ne tonnatara
閉じた北寄貝 満月 のように 光る
- 2 アコロユビ⁷⁷ △シシヤクチレシユ △イエカラカル △ラホキタ △イヌアンゴ
a-kor yupi sisak ciresu i-ekarkar rapoki ta inu-an ko
私の兄 稀な養育を 私にした そのうちに 私が聞くと
- 3 イシカリ △ウンクル △レイリワク子 △トウポニウ子クル △カチヨ
Iskar un kur re irwak ne tu poniw ne kur kaco
イシカリ の 人 三人兄弟である 二人の弟である人 太鼓
- 4 エヌフル △イシカリ △コタン △コアシユル アシ △ヲカアナワ △シ子
enupur Iskar kotan koasuruas oka-an awa sine
が違者だった イシカリ村 で有名だった 私は暮らしていたが ある
- 5 アニタ △ウナフンケ △シヨンゴアリキ △アコロユビ △アコロシヤボウ⁷⁷
an i ta unahunk sonko arki a-kor yupi a-kor sapo u-
時に 招待の 知らせが来た 私の兄 私の姉
- 6 タツトラノ⁷⁸ △イグダシバ⁷⁹ △ケシトカイキヲアリアリシヤム⁸⁰

⁷⁶ 金は「夷」の左側に虫損を示す「ムシ」の注記あり。

⁷⁷ 東では末尾の「ウ」は次行。なお、直前の「アコロユビ」東では「アコロユヒ」。

⁷⁸ 東「ウタツトラノ」。

⁷⁹ 東「イグタレバ」。

⁸⁰ 金では「ム」に虫損を示す「ムシ」の注記。

tat turano ikutaspa kesto kayki oararisam

一緒に 宴会に行った 毎日 も いない

- 7 ラボキタ△ユプケア⁸¹シユル△チトウルセン⁸¹△ハウエエ子ヲカイ

rapoki ta yupke asur citursere hawe ene oka i

そのうちに ひどい噂が 落ちてきた その話はこのような事

(3丁表)

- 8 イシカリ△ウイルプ△アコロユビ⁸²△セマンタアンベ△ウコユルシカ

Iskar uyru p a-kor yupi hemanta an pe ukoiruska

イシカリ に住む者(と)私の兄が 何か 互いに腹を立てた

- 9 シヤラツカムイ△ユフケイケ△ウコシヤンケ△タプ子アンベ△アエホマトウ△

sarak kamuy yupke ike ukosanke tap ne an pe a-ehomatu

戦争の 激しいのを やりあった このような事に 私は驚いた

- 10 アムシヨカタ△アマツコ⁸³シヤヌ△アミコシヨンテ⁸³△アエヲリキ△クツコル

amso ka ta a-matkosanu a-mi kosonte a-eoriki- kutkor

寝台の上に 私は飛び起きた 私の着ている着物を 私は高く 帯を締める

- 11 カ子△アラムコバシテプ△アフンボケチウ△カ子ポンカ⁸⁴シヤ△アシヤ

kane aramkopastep a-kutpokeciw kane pon kasa a-sa-

ようにして 宝刀を 私は帯に差した 金の 小 笠を 私は

- 12 ハウヌ△タプヲロワ△アシヨテレケ△イクルカ子ケウゴシヤンバ△

⁸¹ 東「チトウルセレ」。

⁸² 東「アコロエビ」。なお、2行目「アコロユビ」の「ユ」も「エ」に近い。

⁸³ 東「アミコシヨンテ」(傍線なし)。

paunu tap or wa a-soyoterke ? kewkosanpa
かぶった それから 私は飛び出した ドスンと鳴った

- 13 アヲマツフミ⁸⁴ △ケウワツキ △ヲマナナイ子 △イシカリコタン △アコ
a-oman humi kewewatki omanan ayne Iskar kotan a-ko-
私が行く音が 鳴り響いた 歩き回ってついに イシカリ村 に私は

- 14 シレバ △ヤイヌマレ △アイノアツワ △シツチカラ △ウタレクルカシ △
sirepa iyaynumare aynu at wa ? utar kurkasi
着いた 驚くべし 人が集まって 人々の上

(3丁裏)

- 15 テシナタラ △ウタレコツチャタ △イシカリ △ウイルプ △トウホエウ子イケ⁸⁵ △
tesnatara utar kotca ta Iskar uyru p tu poniw ne ike
平らだ 人々の前に イシカリ の者 二人いる弟の方が

- 16 カチヨタフカル △イン子ウタレ △アコロユビ △シヤラツカムイ △ユブケイケ △
kaco tapkar inne utar a-kor yupi sarak kamuy yupke ike
太鼓の舞をした 大勢の人々と 私の兄が 戦いの 激しいのを

- 17 ウゴアンテ △クルカシケ △エイランケ △クルカシケ △ユブケタムクル △アゴ
ukoante kurkasike ? kurkasike yupke tam kur a-ko-
やりあった その上 その上に 激しい剣を 私は

- 18 テレケレ △アエタメトゴ △セルコシヤンバ △ウタラバウヌワ △ウタレケシウヌワ △
terkere a-etametoko- serkosanpa utar pa un wa utar kes un wa

⁸⁴ 東「アヲマツフミ」。

⁸⁵ 東「トウホニウ子イケ」。

飛ばした 私の剣先が 閃いた 人々の上へ 人々の下へ

- 19 イン子ウタレ△アエタメトゴ△センナラタラ⁸⁶△コカトウコンノ△ユブケニクル△
inne utar a-etametoko- sennatara ? yupke ni kur
大勢の人々に 私の剣先が 閃いた 激しい木の影が

- 20 イコシウトリ⁸⁷△タツポハテキ△タラブシヨ子△アヲマンテ△フナ
i-kosituri tappo patek tarap so ne a-omante huna-
私に伸びた ただそれだけ 夢のように 私は行かせた

- 21 クバキタ△ヤキシカルン△チセウブシヨロ△アラシキマカ△アベ
kpaki ta yayasikarun cise upsor a-osikmaka ape
ふと 気が付いた 家の中 で私は目をあけた 火の

(4丁表)

- 22 トウイシヤム△アキホハリ△インガランコ△シシヨタネシイ^{補注5}△
tuysam a-ehorari inkar-an ko siso ta
そば にわたしはいた 私が見ると 右座に

- 23 シジメノコ△アベトウイシヤム△エホハリ△チキ子シイ△カ子
sine menoko ape tuysam ehorari ? kane
一人の女が 火のそば にいた 金の

- 24 チラシケニ△アキムイカシ△コキツテク△イヨウシタ△ボン
ciotkeni a-kimuykasi kokiktek iyos pon
突く棒 私の頭に 叩く 後から 若い

⁸⁶ 東「センナタラ」。

⁸⁷ 東「イコシトウリ」。

- 25 メノコ △チトウルセン⁸⁸ △カ子チイヲシケニ △チヲメンメウキ △

menoko citursere kane ciotkeni ciomenmewe

女が 飛んできた 金の 突く棒 引き抜かれる

- 26 ヲシユラ △タフヲロワ △エイバタウセアツテ⁸⁹ △ポンメノコ

osura tap or wa ? pon menoko

捨てた それから 若い女が

- 27 キイタカマ △シヨモカエキ △アヌンセ子 △ア子イタバン

? somo kayki anun henne a-ne tap an

決して 他人 ない 私はである

- 28 タンコタンレ △イヨチコタン子 △ヲロウンマツ △ア子ワ △

tan kotan re iyoci kotan ne oro un mat a-ne wa

この村の名は イヨチ村だ その女 私はであって

(4 丁裏)

- 29 イヨチウングル △ヤエリワッコルワ △イラエケアンコ △エイ

iyoci un kur yayirwakkor wa e-rayke-an ko e-e-

イヨチの人 一人兄弟で おまえが殺されて 私がおまえを

- 30 キラアヌワ △エエカアン △石狩ウンマツ △メナシ △シヤムンベ

kira-an wa e-eek-an Iskar un mat menas sam un pe

連れて逃げる て 私はおまえと来る イシカリの女 東 側の者

⁸⁸ 東「チトウルセレ」。

⁸⁹ 東「エイバヌウセアツテ」。

- 31 テケバシテワ△イヨチウンクル△アコロユビ△イノシバワ△イシヤム⁹⁰
 tekepaste wa iyoci un kur a-kor yupi i-nospa wa isam
 引っ張って イヨチの人 私の兄 私を追って しまった
- 32 タフ子アンベ△アエホマトウ△アシヨヨテレケ△ピシユンルルシヤマ⁹¹△
 tap ne an pe a-ehomatu a-soyoterke pis un rur sam
 こんなこと 私は驚いた 私は飛び出した 浜の海の側
- 33 リコテレケレ△ホンレバチフ△レベカツタ△ウムンカツカタ△アキ
 rikoterkere pon repa cip repekatta um un a-e-
 飛ばせた 小さい舟を 沖へ出した 船尾 私は
- 34 ホラリ△ヒリカアツシヤプ△アベコレウキ△アトウイシヨカタ△
 horari pirka assap a-pekorewe atuyso ka ta
 いた よい權 私は漕いだ 海の上で
- 35 アヲマヌフミ△アエコンラムカリ△イクルカタ△イトウレンクニブ△
 a-oman humi a-ekonramkari i-kurka ta i-turen kuni p
 私が行く音 私は夢中になる 私の上で 私の憑き神の
- (5 丁表)
- 36 ユフケフミ△ケウワツキ△ヲマナイ子△イキトウナンカリ△
 yupke humi kewewatki oman ayne i-etunankar
 激しい音 鳴り響く 行くと 私の方に
- 37 ヲレブンラ△チャナヤンケ△レラホセ△ポロ△ロクント△カヤ

⁹⁰ 東ではこの後に△。

⁹¹ 東「ヒシユンルルシヤマ」。

orepun rera ciyanayanke rera ehose poro rokunto kaya
沖からの風が 吹いてきた 風と反対に 大きな 舟 帆

38 テケエムコ△レウナタラ△タフヲロワエマウシテ

tek emko rewnatara tap or wa ?
柱半分 曲がっていた それから

蝦夷浄瑠璃⁹²

3. テキストのアイヌ語形の推定

アイヌ語形の推定にあたっては、特に説明を要する事例を除き、注解は必要最小限に留めてある。詳しくは参考文献中の辞書、語彙等を参照されたい。なお、語形の引用にあたって喉音音素やアクセント記号等は省略した。

[テキスト1]

1 行目 シユバルカ：人名は正確な語形を定めがたい場合が多く（佐藤1990）、仮に suparka という語形を与えたが他の可能性もある。アリエクル：ari 引用の「と」（例：静内方言 tunpu or un kurari ay-ye p 「トゥンプオルンクルと呼ばれる者」）、ye 「言う」、kur 「人、方」（例：千歳方言 makanak a-ye kur 「どう呼ぶ人」）。不定人称接辞 a-（または an-）が ye に付くべきところか。ヌマ子：千歳方言 numan 「昨日」、ただし「子」という表記の理由は不明。

2 行目 クシキイタク：kuski ～つもりだ、はずだ（静内方言）。

3 行目 子ブカイナ：不詳。nep ka 何か（千歳方言）と関連する形式か。アトウイベシヲツタ：pes ～に沿って下へ（千歳方言）。ot ta ～で（千歳方言）。ただし両者が共起した実例はこれまでのところ未見。

⁹² 東にはこの文句無し。

4 行目 ア子ウヲマレイケカ：uwomare 拾い集める（千歳方言）。
euomare To meet (Batchelor 1938: 142)。euwomare という語形が推定されるが、要検討。ウキベコラチアン：uype 木片（千歳方言）。

5 行目 ラムア^ニクシ^ニタ^ニプ：ramuan 物心がつく（静内方言）という形式があるが、要検討。kushtap だから（久保寺 1992：149）。イエトウナンカリ：eetunankar それに向つて（久保寺 1992：71）。なお、ここでは最初の e を e-（お前を）と解釈した。

6 行目 バン^ニチヨ：panco 大工（幌別方言その他）（服部 1964：100）。

[テキスト2]

1 行目 子ブイタキウン：ウンは不詳。トノトシリカ：sirka 表面（千歳方言）という形式はあるが、このような句で用いられた実例は未見。ウキイノンノ：inonno 祈詞（金田一 1931 b：400）から uweinonno のような語形が推定されるが実例は未見。レベロク：kim erok kamuy 山にいる神（千歳方言）から rep erok「沖にいる」のような語形が推定されるが実例は未見。

2 行目 コバエツタ：不詳。

3 行目 アツテカニ：attekani 片手で持つ（田村 1996：34）。

5 行目 カムイライナ子：oyna 節のついた物語の一種（ただし、どんなものかは知らない）（千歳方言）。ekoyayrap 教える（美幌方言）（服部 1964：162）から eukoyayrap のような語形が推定されるが実例は未見。

6 行目 エイセツチセチウ：eiyehetce-eciw オ、と返事をする（久保寺 1992：58）。エシレラツトム：不詳。

7 行目 アウンキマウエ：aungi 扇（久保寺 1992：35）。チニシコユブ：不詳。

9 行目 エイゴヌマチ：numat 紐（千歳方言）を含む形式と思われるが詳細は不詳。エシウア^ニシヨ^ニロロ：upsor 懐（千歳方言）を含む形式と思われるが詳細は不詳。ヲトウシマコツタ：不詳。

11 行目 クルカシウコセトワク：ukohetuku 相起こる（金成，金田一 1963：432）。ただし、このような句の実例は未見。

12 行目 マワシノグニ：mawashnu chise otta 縁起のよい家で（金成，金田一 1959：70）。

〔テキスト 3〕

1 行目 ウカム：Ukamu adv. One above another (Batchelor 1938: 523)。kamu「覆う」（千歳方言）に u-「互い」が接合したものか。その場合，「重なり合う」のような意味が推定される。ボキセイ：pok-sey ウバガイ，ホッキガイ（知里 1962 [1975]：124）。シカリ^チユフ子：shikari chup 満月（久保寺 1992：242）。ne ～ように（千歳方言）。例：kane maw ne uwetununke 「金の音のように鳴り響く」。トンナタラ：tonnatara 光る（千歳方言）。備考：この冒頭の一句はその後に続くテキストとの関係が明確でなく，テキストの一部なのか，タイトルなのか，または誤って無関係な句が挿入されたのか，今のところ明確でない。従って，内容の推定についても，全く別の解釈がなされる可能性がある。

2 行目 シシヤクチ^レシユ△イエカラカル△：shisak chiresu iyekarkar たぐいなき養育（を）わたしにしてくださって（金成，金田一 1959：51）。ラホキタ：rapokita そのあいだに（金成，金田一 1963：48），rapoketa 折節（金成，金田一 1963：272）。

3 行目 レイリワク子：re irwak ne（日本語訳なし）（金成，金田一 1963：239）。ポニウ子クル：poniunekur 年若の者（金成，金田一 1963：386）。カチヨ：kaco 太鼓（樺太方言）（服部 1964：177）。

4 行目 エヌフル：enupur 達者である，うまい。例：at enupur 投げ縄がうまい（千歳方言）。

5 行目 ウナフンケ：unahunke...を招待する（田村 1996：771）。

6 行目 ケシトカイキ：kayki ～も（千歳方言）。ただし kesto kayki のような句の存在はこれまでのところどの資料，文献でも実証できていない。ヲアリアリシヤム：oararisam 全くない（千歳方言）。

7 行目 ユブケア^シユル：yupke asuru 椿事の知らせ，凶報（久保寺 1992：1038）。

8 行目 ウイルプ：uyru ～に住む（千歳方言）。セマンタアンベ：hemanta an pe 何か（千歳方言）。hemanta 何（幌別方言）（服部 1964：150）。

9 行目 シヤラツカムイ：Sarak-kamui The god or demon of accidents (Batchelor 1938: 438)。ウコシヤンケ：おそらく ukosanke のような形式に該当すると思われるが不詳。なお、17 行目にはウゴアンテとあり、ウコシヤンケは誤写の可能性もあると思われる。タップ子アンベ：tap ne an pe こんなもの（千歳方言）。アエホマトウ：nep aehomatup なにか驚くことや（金成，金田一 1963：166）。

10 行目 アムシヨカタ：amso-ka ta 座敷の上で（金成，金田一 1959：184）。アマツコシヤヌ：amatkosanu ぱつとわれ起ち（金成，金田一 1963：465）。なお，matkosanu-an パツと起ち上がり（金成，金田一 1959：57）という例もある。アエヲリキ△クツコル：aeorikikur kutkor kane（久保寺 1992：522）。

11 行目 アラムコバシテプ：aram(u)kopashtep 宝刀（久保寺 1992：27）。アフンポケチウ akutpokechiu われ帯に差し（金成，金田一 1963：44）。ア^{シヤ}ハウヌ：a-putaunu 人が蓋をする（千歳方言）のような形式を考慮すると，a-sapaunu という語形は実証できていないが，「私が頭に付ける」の意か。

12 行目 ア^{シヨ}ヨテレケ：soyoterke 外へ飛び出す（千歳方言）。この動詞は soyoterke-an のように活用するが，10 行目アマツコ^{シヤ}ヌのような形式から考えて a-soyoterke という形式もあった可能性がある。イクルカ子：不詳。ケウゴシヤンバ：keukosanu どしんと音が一つした（久保寺 1992：127）。複数形か。

13 行目 アヲマタフミ：a-oman humi と解したが，自動詞 oman が他動詞の活用を行っているかにみえる点は問題である。a-は humi と統合しているとみることもできるかもしれないが要検討。ケウワツキ：kewewatki はまだ実証されていないが，語根 kew の部分反復形に-atki が接合したもののか。

14 行目 ヤイヌマレ：iyaynumare たいしたもんだ，よくできる（中川

1995:46)。シツチカラ：不詳。

15 行目 テシナタラ：kotan kurkashi tesnatara べったりのびて平になっている（久保寺 1992:272）。

17 行目 ウゴアンテ：yupke tumi ukoan ひどい戦争があった（千歳方言）。ukoante はこの場合「(戦争を) 起こす」という意味か。エイランケ：不詳。ユプケタムクル：yupke tamkur akoterkere 激しい太刀をわれふりとばす（金成，金田一 1963:191）。

18 行目 アエタメトゴ：aetametoko sennatara わが太刀のさきにじわりじわり斬られ（金成，金田一 1959:328）。セルコシヤンバ：upsor un tam serkosanpa 懐の刀をさっと抜く（千歳方言）。

19 行目 コカトウコンノ：不詳。

20 行目 タラブシヨ子△アオマンテ：tarap（合成語の中で）夢（千歳方言）。tu takar sone re takar sone auweomante 二つの夢どころ三つの夢どころに気が遠くなってしまう（金成，金田一 1959:191）。takassane anomante（Pilsudski 1912:146）。細部はなお要検討。フナクバキタ：huna-kpakita どれほどたったかして（金成，金田一 1959:250）。

21 行目 アヲシキマカ：chise upsoro aoshikmaka 家のふところにわが目が開いた（金成，金田一 1963:203）。

22 行目 トウイシヤム tuysam そば（田村 1996:746）。チキ子シイ：不詳。

24 行目 チヲシケニ：不詳。ciotkeni「突く棒」か。コキツテク：kokiktek「〜で叩く」か。イヨウシタ：不詳。iyos「後から」か。

25 行目 チヲメンメウキ：不詳。omewke 根こそぎ倒れる（千歳方言）から，ciomewmewe ぐらぐらと根こそぎ引き抜かれる（？）のような語形か。

26 行目 エイバタウセアツテ：不詳。

27 行目 キイタカマ：不詳。itak「言う」を含む形式か。アヌンセ子：anun 他人（千歳方言）。senne 打消（金成，金田一 1959:361）。henne 否定副詞（様似方言）（Sato 2002:101）。

29 行目 ヤエリワッコルワ：yayirwaki koro ひとり兄弟(金成，金田一 1963：49)。イラエケアンコ：e-rayke-an ko「おまえが殺されると」のような語形が推定されるが，不詳。エイキラアヌワ：e-ekira-an「私がおまえを連れて逃げる」(?)。エエカアン：e-EEK-an「私がおまえと来る」(?)。なお，これらは胆振方言の人称形式である可能性がある(知里 1936 [1974]：75)。

31 行目 テケバシテワ：atekepashte ひっぱって行く(金成，金田一 1963：407)。

32 行目 ピシユンルルシヤマ：rur-sam 海辺(知里 1956 [1973]：412)。

33 行目 リコテケレ：rikoterke-an 私が飛び上がる(千歳方言)のような語形かもしれない。ホンレパチフ：pon repachip-oro 小さな沖舟の中の(金成，金田一 1963：248)。レベカツタ：repekatta 沖へぐいっと出し(金成，金田一 1963：52)。ウムンカツカタ：不詳だが，umta The stern of a boat (Batchelor 1938: 532) と関係する形式か。

34 行目 アベコレウキ：bekorewe 水をかきまわす(金成，金田一 1959：336)。

35 行目 アエコンラムカリ：konramkonna karikari 我が心持飛びまはる(久保寺 1992：138) と関係する a-ekonramkari のような語形か。

37 行目 レラホセ：ehose ～に逆らって(千歳方言)。ロクント：ro-kunteu いくさ船(金田一 1931 b：301)。カヤテケエムコ：kayatek konna reunatara 帆ばしらをたわませ(金成，金田一 1959：335)。

38 行目 ヤエマウシテ：不詳。

4. 表記および言語的特色

本書の表記の重要な特色の一つは，二文字に傍線を付した表記がみられることである。すなわち，「シユ」，「チャ」，「チヨ」(以上テキスト1)，「ウエ」，「シヤ」，「シユ」，「シヨ」，(以上テキスト2)，「シヤ」，「シユ」，「シヨ」，「チユ」，「チヨ」(以上テキスト3)である。これは恐らく，二文字が一音節であることを示したものと考えられ，表記の正確さが意図されたものと言える(ち

なみに、「サ」、「ス」、「ソ」は用いられていない。また、「シエ」はなく、「セ」が用いられている)。なお、アイヌ語の hemanta を「セマンタ」のように表記した例があり、これは筆録者が東北地方の出身であることを示す可能性がある(佐藤 1995: 13)。

本書の性格を表記面から決定付けるもう一つの大きな特色はアイヌ語の tu にあたる音節の表記に「トウ」を用いる、という点である。この日本語にない音節の表記には江戸時代を通して様々な試みがなされたが(佐藤 1995: 8)、管見の及ぶ限り、江戸時代の文献においてアイヌ語の表記に「トウ」を用いた例を筆者は寡聞にして知らない。本書の成立年代、筆者について明らかにするためにも、本書のこのような表記法がどこに由来するのか、蘭学、英学などの分野の研究を参照しつつ、今後明らかにしていく必要があると思われる(なお、杉本(1985)の資料によれば、「トウ」の最古の例はこれまでのところ 1860 年刊の『英語箋』のようである)。

本書のアイヌ語にみられる主要な特色をいくつかあげる。

基本的には 1 人称主格に a-を用いている⁹³。これは、北海道南西部(沙流方言、千歳方言、幌別方言等)の諸方言に現れる特色である(佐藤 1995: 31)。もっとも、例は少ないながら、ア子ウヲマレ an-euwomare([テキスト 1] 4 行目)、ア子カラカル an-ekarkar([テキスト 2] 7 行目)のように、確実に an-を含んでいるとみられる語形がある点も注目される。

否定の形式として、セン子([テキスト 3] 27 行目)という、様似方言の henne または幌別方言の senne にあたる形式がみられる。もっとも、もう一つの否定の形式である somo にあたるシヨモ([テキスト 3] 27 行目)という形式もテキストには含まれており、また、沙流方言でも senne という形式は報告されているので(金田一 1931 b: 270)、この点のみを過大に取り上げることとはできないのではあるが。

引用の形式としてアリ ari([テキスト 1] 1 行目, [テキスト 2] 5 行目)

⁹³ もっとも、テキスト 1, 2, 3 が同じ方言で書かれている保証は必ずしもないかもしれないという点は注意する必要がある。

が用いられているが、これは静内方言（織田ステノ氏による）や幌別方言（金成，金田一 1959：61）で知られている特徴である。

接続助詞テキスト 3 で ko「～すると」が現れる点は、沙流方言や千歳方言よりもむしろ、幌別方言（金成，金田一 1959：52）、様似方言（岡本ユミ氏による）のような方言との類似を思わせる。

存在の動詞は例は少ないながらも oka という形式であるとみられ（[テキスト 3] 4 行目，7 行目），この点では幌別方言や様似方言の okay という形式よりもむしろ沙流方言との類似を示す。

特異な語彙としてカチヨ（[テキスト 3] 3 行目，16 行目）kaco 太鼓（服部 1964：177），（金田一 1913：104）という形式が注目される。管見の及ぶ限りでは、北海道方言にこの形式が現れている例は皆無である。

極めて特殊な現象として、現在、一般に自動詞として知られている形式が、他動詞の活用をしている例のあることが注目される。このような現象はアイヌ語では極めて稀である（佐藤 2002：66）。例：アマツコシヤヌ（[テキスト 3] 10 行目）a-matkosanu「私がぱっと立ち上がる」，アシヨヨテレケ（[テキスト 3] 12 行目，32 行目）a-soyoterke「私が外へ飛び出す」。現代のアイヌ語資料においても、少なくとも a-matkosanu, matkosanu-an は自他両方の活用を行っている例がみられる（たとえば，金成，金田一 1963：465，金成，金田一 1959：57，佐藤知己による千歳方言の調査資料など。なお，a-soyoterke という語形はこれまでのところ未見）。これらは，単純な文法的無理解に基づく可能性もあるが，単なる偶然かどうか，なお検討が必要と思われる。今日でも稀な特殊な例を記録したものだとなれば，本書の資料的信頼性を考える上でも重要な問題と思われる^{補注6}。

5. まとめ

本稿では「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」の校合を行い，翻刻テキストを作成した。また，推定されるアイヌ語テキストを併せて作成し，表記，言語上の特色を指摘した。その結果，本書のアイヌ語（特に「テキスト 3」）は，概

して北海道西南部方言の特色を示し、中でも現在知られている限りでは、沙流方言よりもむしろ幌別方言のような胆振地方方言との親近性が多くみられることが明らかとなった。また、現在、例外的現象として知られている自他両用活用の動詞の例と考えられる形式が既にみられるという点でも資料的に重要な意義を持つことを指摘した。今後、本書成立の事情やテキストの不明箇所について、さらに検討を重ねて行きたいと考えている^{補注7}。

補注

補注1 東「ト云蝦夷」。

補注2 東「言阿とて言事」。

補注3 東「言ふ事」。

補注4 東「相手可ら」。

補注5 東「シシヨタ子シイ」

補注6 この現象は、Sapir(1917:86)で扱われているダコタ語の自動詞における active, inactive の区別と関連を有する可能性がある。

補注7 北海道ウタリ協会主催の「平成14年度アイヌ語指導者研修会」で筆者が本資料についてお話ししたところ、会場におられたアDOI氏から、アイヌ語話者自身が筆録したか、それに近い事情があったのではないか、というご意見をいただいた。録音機械がない時代にアイヌ語をこれほど正確に筆録をしていること自体驚異的であり、この点から考えて、傾聴すべきご意見であると思う。記して感謝申し上げる。

参考文献

- 井上宗雄他(編). 1999. 『日本古典籍書誌学辞典』. 東京: 岩波書店.
- 上原熊治郎. 1792. 『毛し本草』(全一冊). (市立函館図書館所蔵 [00388/005/3/001])
- 上原熊治郎. 1792. 『藻汐草』.(複製 金田一京助解説, 成田修一撰, 『アイヌ語資料叢書 藻汐草』. 東京: 国書刊行会, 1972.)
- 上原熊治郎. 1792. 『蝦夷方言藻汐草』(乾・坤). (東北大学付属図書館狩野文庫 [狩第4門 9466])
- 金成マツ筆録, 金田一京助訳注. 1959. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』1. 東京: 三省堂.
- 金成マツ筆録, 金田一京助訳注. 1963. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』3. 東京: 三省堂.
- 金田一京助. 1913 [1993]. 「蝦夷語学の鼻祖上原熊次郎と其の著述」.(『金田一京助全集』6. 東京: 三省堂, 1993 所収.)

- 金田一京助. 1914. 『北蝦夷古語遺篇』. 東京：郷土研究社.
- 金田一京助. 1924 [1993]. 『世界最古の蝦夷語彙——佐々木博士所蔵の『松前の言』について——』. (『金田一京助全集』6. 東京：三省堂, 1993 所収.)
- 金田一京助. 1931 a. 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』1. 東京：東洋文庫.
- 金田一京助. 1931 b. 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』2. 東京：東洋文庫.
- 金田一京助. 1937 [1993]. 「蝦夷語学事始」. (『金田一京助全集』6. 東京：三省堂, 1993 所収.)
- 金田一京助. 1938 [1993]. 「アイヌ語学の隠れたる先達——亀田次郎氏発見の『番人円吉 蝦夷記』に就いて——」. (『金田一京助全集』6. 東京：三省堂, 1993 所収.)
- 久保寺逸彦. 1977. 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』. 東京：岩波書店.
- 久保寺逸彦. 1992. 『久保寺逸彦編アイヌ語・日本語辞典稿』. 札幌：北海道教育委員会.
- 佐藤知己. 1990. 「アイヌ語の人名について」. 『アイヌ文化』15. 札幌：アイヌ民族文化伝承保存会. 35-44.
- 佐藤知己. 1995. 『「蝦夷言いろは引」の研究』. 札幌：北海道大学文学部.
- 佐藤知己. 2002. 「アイヌ語動詞の特色」. 『言語』11. 東京：大修館書店. 66-67.
- 彰考館文庫(編). 1918. 『彰考館図書目録』. 水戸：彰考館文庫.
- 杉本つとむ. 1985. 『日本英語文化史の研究』. 東京：八坂書房.
- 田村すず子. 1996. 『アイヌ語沙流方言辞典』. 東京：草風館.
- 知里真志保. 1936[1974]. 『アイヌ語法概説』. 東京：岩波書店. (知里真志保. 『知里真志保著作集』4. 東京：平凡社, 1974 所収.)
- 知里真志保. 1953[1976]. 「分類アイヌ語辞典第一巻植物篇」. 『日本常民文化研究所彙報』64. 東京：日本常民文化研究所. (知里真志保. 『知里真志保著作集』別巻Ⅱ. 東京：平凡社, 1976 所収.)
- 知里真志保. 1954[1976]. 「分類アイヌ語辞典第三巻人間篇」. 『日本常民文化研究所彙報』68. 東京：日本常民文化研究所. (知里真志保. 『知里真志保著作集』別巻Ⅱ. 東京：平凡社, 1976 所収.)
- 知里真志保. 1956[1973]. 『地名アイヌ語小辞典』. 東京：楡書房. (知里真志保. 『知里真志保著作集』3. 東京：平凡社, 1973 所収.)
- 知里真志保. 1962 [1975]. 「分類アイヌ語辞典第二巻動物篇(遺稿)」. 『日本常民文化研究所彙報』87. 東京：日本常民文化研究所. (知里真志保. 『知里真志保著作集』別巻Ⅰ. 東京：平凡社, 1975 所収.)
- 中川裕. 1995. 『アイヌ語千歳方言辞典』. 東京：草風館.
- 南葵文庫. 1908. 『南葵文庫蔵書目録』. 東京：南葵文庫.
- 服部四郎(編). 1964. 『アイヌ語方言辞典』. 東京：岩波書店.
- 不詳. 不詳. 「蝦夷浄瑠璃譯文」. (京都大学附属図書館所蔵 [言 2 H//10]).
- 不詳. 不詳. 「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」. (北海道立図書館所蔵マイクロフィルム HM

385).

不詳. 不詳. 「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言 享和辛酉唐太事状 蝦夷曆安政三丙辰年曆」.

(東京大学附属図書館所蔵 [E39/125]).

福田耕二郎. 1991. 『水戸の彰考館——学問と成果』. 水戸: 水戸史学会.

北海道 (編). 1969. 『新北海道史』第7巻資料1. 札幌: 北海道.

Batchelor, J. 1938. *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. 4th ed. Tokyo: Iwanami-shoten.

Pilsudski, B. 1912. *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow: The Imperial Academy of Sciences.

Sapir, E. 1917. Review of Uhlenbeck, *Het Passive Karakter van het Verbum Transitivity of van het Verbum Actionis in Talen van Noord-Amerika*. *International Journal of American Linguistics* 1. 86-90.

Sato, T. 2002. A Basic Vocabulary of the Samani Dialect of Ainu. *The Annual Report of Cultural Science* 106. Faculty of Letters. Hokkaido University. 91-126.